

『詩経』における情景描写の変遷

―大雅の開国叙事詩を中心に―

大野圭介

富山大学文学部紀要第65号
2016年8月
抜刷

『詩経』における情景描写の変遷

―大雅の開国叙事詩を中心に―

大野 圭介

中国古代の詩文に叙景表現が乏しいことは夙に指摘されている。しかし山水の描写が皆無というわけではない。『詩経』における山水観については既に王国璦『中国山水詩研究』が、『詩経』に描かれる山水とその表現法を多方面から分析し、『詩経』の時代は山水詩の成熟した時期からまだまだ遠いとはいえ、『詩経』に反映している山水観、及び詩人の山水の景物に対する描き方から、後世の山水詩との間にその淵源としての関係がある程度見出すことはできるかも知れない。」¹と言う。小尾郊一『中国文学における自然と自然観』でも『詩経』に描かれた山水自然の描写を分析し、おおむね比興的な用方をされていて、山水そのものをめぐる意識はないと結論づける。²最近でも孫旭輝「自然審美經驗視閥下的山水内質分析」³は『詩経』の山や河川の描写を詳細に分析し、それらを原始的な自然神崇拜に表れたもの、比興の運用の中に表れて情感表現の背景となっているもの、自然審美意識の発生を内包するものの三種に分類している。

これらはいずれも山水に対する美意識の観点からの分析である。山水以外の情景描写にも範囲を広げてみると、大雅の開国叙事詩の中には神話故事の情景を事細かに描くものはいくつか見られる。山水の描写とはまた別の観点からの分析も可能であろう。

本論では大雅開国叙事詩の情景描写の分析を通して、その変化の過程、及び作詩の目的の違いについて考察する。

まず周祖后稷を歌う詩を挙げると、大雅「生民」と周頌「思文」がある。「生民」から見てみよう。

厥初生民、時維姜嫄。生民如何、克禋克祀、以弗無子。履帝武敏歆、攸介攸止。載震載夙、載生載育、時維后稷。

初めの民を生みたまいしは、これぞ姜嫄。民を生みしはいかにぞ、犠牲を焼いてよく祭りして、子を授からぬ事のなきよう祈った。かくて上帝の足跡を踏めば、大いなる幸いがその身に止まる。胎動ありて身を引き締め、産み落とし育てたるは、これぞ后稷。(一章)

誕彌厥月、先生如達。不拆不副、無苗無害。以赫厥靈、上帝不寧。不康禋祀、居然生子。

十月十日を過ぎて、まず生まれしは子羊のよう。胞衣も破れぬままにして、傷もなく害もなし。その靈妙の明らかになりしに、上帝の心安からず、祭りにも満足せぬ故に、何と斯様な子を産ませたり。(二章)

誕眞之隘巷、牛羊腓字之。誕眞之平林、會伐平林。誕眞之寒冰、鳥覆翼之。鳥乃去矣、后稷呱矣。實覃實訃、厥聲載路。

さてこの子を路地裏に置けば、牛や羊が庇い育てる。この子を平らな林に置けば、木こりに出会って助けられる。この子を冷たい氷の上に置けば、鳥が翼で覆い暖める。鳥がようやく去れば、后稷は呱呱の声を上げる。まことに伸びやかに大きな、その声は道じゅうに響き渡る。(三章)

誕實匍匐、克岐克嶷。以就口食、蓺之荏菹。荏菹施施、禾役穰穰。麻麥幪幪、瓜瓞嗒嗒。

さて這い回っている頃より、よく智慧の優れた子。食を求めに行き、エゴマや大豆を植えた。エゴマや大豆は高く伸び、アワの穂並みは頭を垂れる。麻も麦もよく茂り、瓜の実はたくさん実った。(四章)

誕后稷之穠、有相之道。弗厥豐草、種之黃茂。實方實苞、實種實稂。實發實秀、實堅實好。實穎實栗、即有邰家室。

さて后稷の畑仕事は、それを助ける道もあった。茂った草を切り払い、よい穀物を植える。苗はそろってよく茂り、選ばれた種はよく伸びる。花は開き穂は秀で、実は堅く良い形。穂先はびっしり並び、有邰の采邑には家も集まる。(五章)

誕降嘉種、維秬維秠、維糜維芑。恆之秬秠、是穫是畝。恆之糜芑、是任是負、以歸肇祀。

天の下された良い種は、黒黍に実の多い黍、苗の赤いアワに白いアワ。黒黍は畑いっぱいに、刈り入れて畝に置く。アワも畑いっぱいに、抱えたり背負ったり、持ち帰って祭りを始める。(六章)

誕我祀如何、或春或揄、或簸或蹂。釋之叟叟、烝之浮浮。載謀載惟、取蕭祭脂、取羝以軋。載燔載烈、以興嗣歲。

さて我が祭りはいかにぞ、臼でつく者も取り出す者も、箕でおふる者も足で踏む者も。さらさらと米をとぎ、ふわふわと蒸す湯気が立つ。祭りの次第を考えつつ、ヨモギを取り脂を祭り、雄羊を取り道祖神を祭る。犠牲を炙る火を激しくし、来年の豊作を祈る。(七章)

印盛于豆、于豆于登。其香始升、上帝居歆。胡臭亶時、后稷肇祀、庶無罪悔、以迄于今。

われ肉を高^{たかつき}坏に盛る、木の高坏に素焼きの高坏に。その香りの立ち上るや、上帝は居ながらに受けたもう。香りはまことに時よろしく、后稷の祭りを始めしより、罪とが無きをこいねがい、もって今に至れるなり。(八章)

一～三章で誕生から農業創始まで、四章後半から六章まではあらゆる農作物が豊かに実るさまが鋪陳表現で描かれる。七・八章では祭祀の情景が描かれる。

一方「思文」は、

思文后稷、克配彼天、立我烝民。莫匪爾極、貽我來牟、帝命率育。無此疆爾界、陳常于時夏。

ああ文徳ある后稷は、よく彼の天に配され、わが諸々の民を養う。徳の極みにあらざる無く、大麦小麦を贈りたまひ、上帝は命じて遍く養わせる。限りなく境なく、常の道を中華に広めたり。

后稷の農業創始をたたえるが、具体的な事蹟や情景については全く描かれない。しかし「生民」に見られるような情景描写が周頌に皆無というわけでもない。たとえば農事の情景を描く作品は、

載芟載柞、其耕澤澤。千耦其耘、徂隰徂畛。侯主侯伯、侯亞侯旅、侯彊侯以、有嘏其饁。思媚其婦、有依其士、有略其耜、俶載南畝。播厥百穀。實函斯活、驛驛其達。有厭其傑、厭厭其苗、綿綿其麋。載穫濟濟、有實其積、萬億及秭。爲酒爲醴、烝畀祖妣、以洽百禮。有飴其香、邦家之光、有椒其馨、胡考之寧。匪且有且、匪今斯今、振古如茲。

草を刈り木の根を刈り、耕せば土くれがさくさく碎ける。大勢並んで草削り、田に行き畔に行く。戸主に長男、次男に郎党、強い者も弱い者も、みんな揃って饁^{かだい}を食む。みめよき女も、たくましき男も、鋭き耜^{すき}もて、南の畝から仕事の始め。その百穀を播けば、種は膨らみ芽は萌える。苗は次々伸び出でて、秀でた苗はよく育つ。よく育ったその苗は、念入りに草を除く。さて刈り入れはみな総出、山と積まれた作物は、^{ようすじようす}万十万はた百万。酒を作り醴^{あまさけ}を作り、祖先に進め奉り、諸々の礼が備わる。かくわしきその香りに、国家の輝きも増し、良きその香りに、長寿の安らかならんことを。この場所のみのことではなく、今年のことでもなく、古えより斯くの如きなり。〔載芟〕

前半で藉田の耕作の様子や田畑の苗がよく育った様子が細やかに描かれ、後半では祭祀の情景が描かれる。

麥芟良耜、俶載南畝。播厥百穀、實函斯活。或來瞻女、載筐及筥。其饌伊黍、其筥伊糾、其罇斯趙、以礪茶蓼。茶蓼朽止、黍稷茂止。穫之挈挈、積之栗栗、其崇如墉、其比如櫛。以開百室、百室盈止、婦子寧止。殺時桴牡、有球其角。以似以續、續古之人。

サツサツと良い耜で、南の畝から仕事の始め。その百穀を播けば、種は膨らみ芽は萌える。時に来たる女を見れば、手には籠を持つ。持ち来たる食事は黍の飯、着けたる笠は軽やかに、その鋤を地面に突いて、雑草をば取り除く。雑草は朽ち枯れて、黍や稷^{くもきび}は生い茂る。ザクザクと刈り取り、どんどん積みめば、その高さこと城壁のよう、その並ぶこと櫛のよう。さても多くの部屋を開ければ、部屋はみな満ちあふれ、女子供も安心する。この口黒の、曲がれる角持つ牛を犠牲に捧げる。かくて子孫は続き、先祖に続かんことを。〔良耜〕

種蒔きから収穫までの一連の情景が描かれる。また収穫を報告する祭祀そのものの風景が描かれる作品もあり、

猗與漆沮、潛有多魚。有鱣有鮠、鰪鰾鰻鯉。以享以祀、以介景福。

ああ漆と沮の川よ、潜に多くの魚あり。鱣もいれば鮠もあり、鰪・鰾・鰻・鯉あり。進めて祭り、大いなる福を求めん。（「潜」）

漆沮の魚の豊かさを「有鱣有鮠、鰪鰾鰻鯉」という鋪陳で描き、「景いなる福」を祈る。

豐年多黍多稌、亦有高廩、萬億及秬。爲酒爲醴、烝畀祖妣、以洽百禮、降福孔皆。

豊年には黍も稌も多く、高い廩もあり、万十万はた百万。酒を作り醴を作り、祖先に進め奉り、諸々の礼が備われれば、下される福も大いに遍からん。（「豊年」）

これも「多黍多稌」「爲酒爲醴」といった列挙表現を用いて豊年を感謝する祭祀の模様を描くが、三句めから六句めまでは「載芣」と同じ句である。祭祀の様子を表現する定型句として定着していたのであろう。かくの如く「生民」にみられる豊かな情景描写の萌芽は周頌にも既に見られるのであって、このような描写の有無をもつて直ちに詩の新古を決めることは困難である。白川静も周頌は本来「廟歌としての性質上、華を去って朴を求め、その祭祀儀容に対応させようという制作意識の上から、要求されたものに外ならない。」のであって、周頌の様式は「必ずしも詩の新古や表現様式の素朴性を意味するものではな」と言う⁴。

そうであれば、「思文」と「生民」に表現様式の違いが生じた要因は、それらが歌われた場面や歌う人々の違いに求めなければならない。「思文」が廟歌であることはほぼ確実であるが、では「生民」はいかなる場面で歌われたものであろうか。他の開国叙事詩を検討することによって、その手がかりを探ることにしよう。

二

次に鹵に根拠地を定めた公劉と、岐山に根拠地を定めた古公をうたう詩を見てみよう。大雅「公劉」では公劉が新都を造営するまでの一連の行動が描かれる。

篤公劉、匪居匪康。迺場迺疆、迺積迺倉、迺裹餼糧、于橐于囊。思輯用光、弓矢斯張、干戈戚揚、爰方啓行。

情け深い公劉は、住まうに安らかでいらなかった。畔を区切って田畑を限り、穀物を積み上げ倉に蓄え、餼糧かれいを詰め込むは、背負い袋に頭陀袋。人々は睦まじくも威勢良く、弓矢をば引き絞たてり、干・戈・戚ほこ・揚おのもて、ここに旅を始めた。 (一章)

篤公劉、于胥斯原。既庶既繁、既順迺宣、而無永歎。陟則在巘、復降在原。何以舟之、維玉及瑤、韓琫容刀。

情け深い公劉は、この原野を眺めやった。物は豊かで草木が茂り、この地にあまねく落ち着けば、不満に思う者はない。登っては小高い山に立ち、降りては原野を見回る。公劉の身に帯ぶるは何ぞ、それはおび玉に瑤のたま、鞘飾りに腰の刀。 (三章)

篤公劉、逝彼百泉、瞻彼溥原。迺陟南岡、乃覲于京。京師之野、于時處處、于時廬旅。于時言言、于時語語。

情け深い公劉は、多くの湧き出る泉に行き、広い平原を眺めた。南の丘に登り、都のあたりを見渡した。都を置く野よ、そこで皆はとどまり、そこで人々を宿らせた。そこで皆はさざめき合い、そこで皆は語り合った。 (四章)

篤公劉、于京斯依。踰踰濟濟、俾筵俾几、既登乃依。乃造其曹、執豕于牢。酌之用匏、食之飲之、君之宗之。

情け深い公劉は、この都に身を寄せた。人々は揃って居並び、むしろを敷き腰掛けを並べ、席に着いてよりかかる。そこで下僚を遣わして、豕を檻から引き来た。ふくべの杯もて酒を酌み、皆に酒食を振舞い、君となり宗主となった。 (五章)

篤公劉、既溥既長。既景迺岡、相其陰陽、觀其流泉。其軍三單、度其隰原、徹田爲糧。度其夕陽、鹵居允荒。

情け深い公劉の、開いた土地は長く広い。丘に登って都の方位を正し、山の南北の寒暖を調べ、水源の様子を観察した。その軍は三個部隊、沼地や原を測量させ、田畑を治めて食糧を作る。山の西側を測量すれば、鹵の地はまことに広大なり。 (六章)

篤公劉、于爾斯館。涉渭爲亂、取厲取鍛。止基迺理、爰衆爰有。夾其皇澗、溯其過澗。止旅乃密、芮鞠之即。情け深い公劉は、幽にて宮室を建てた。渭水の中流を横切り渡り、砥石や鎚石を切り出した。基礎を定め整えれば、多くの者が造営に携わる。かの皇澗を挟み、かの過澗を遡るところ。諸々がびつしりと住まいを構え、川の澳にまで迫るほど。

一章で出発の準備を整える情景、二―四章で新たな土地を高所から眺めた風景と、そこを新都と定めて人々がやわらく情景、五章で宴会の情景、六章で新都の周囲を調査する様子、七章で新都を造営して人々が住み着き発展する情景が描かれる。しかし二章に描かれる風景の描写はあまり細かくはなく、後半ではむしろ公劉の出で立ちの方を詳細に描いている。三章でも「溥原」を見たというだけであつて、具体的に何があるのかは記されず、後半では人々がそこに宿つて笑いさざめくさまの方をいきいきと描いている。この詩は全体に新都の風景よりも、それを造営する人々の行動や様子を描くことの方に重点があるといえる。

「縣」になると三章で古公が都を定めた地の風景が、四―七章で城門を造営して完成するまでの情景が描かれる。

周原膺廬、萑荼如飴。爰始爰謀、爰契我龜。曰止曰時、築室于茲。

周原は肥沃で、萑たがらしや荼は飴のげしのよう。さても謀を始めるに、亀に刻んで占えば、ここに止まるによい時なり、ここに宮室を築くべしと。(三章)

迺慰迺止、迺左迺右。迺疆迺理、迺宣迺畝。自西徂東、周爰執事。

かくて住み着き落ち着かんと、左に右に立ち働く。畔を区切って田畑を限り、溝を通して畝を作る。西から東へと向かい、遍く作業に励んだ。(四章)

乃召司空、乃召司徒、俾立室家。其繩則直、縮版以載、作廟翼翼。

かくて司空を召し、司徒も召して、宮室を建てさせた。その墨繩はまっすぐに、板を縛つて土を載せ、作れる廟は形もみごと。(五章)

揀之陟陘、度之薨薨。築之登登、削屨馮馮。百堵皆興、鼙鼓弗勝。

土を盛つては次から次と、版築に盛ることどつさり。杵でとんとん突き固め、削ってはばんと整える。百丈の牆がすべて立ち、太鼓の音も鳴り止まぬ。(六章)

迺立皋門、皋門有伉。迺立應門、應門將將。迺立冢土、戎醜攸行。

かくて外門が立てば、外門は高くそびえる。正門が立てば、正門はいかめしき構え。土塁を築くのは、戎どもの行くところ。(七章)

三章では都を定めた「周原」を「膴膴」「萁荼如飴」と形容し、五・六章では家屋や城門を建築する様子を具体的に描写し、七章では完成した城門の様子を「有伉」「將將」と形容している。岐山の都そのものの立派さを描くことにも、古公たちの行動を描くのと同じくらい重点を置いているといえる。

ところで公劉は『詩経』では「公劉」以外にその名を見ないが、「公劉」一章の「于囊于囊、思輯用光。弓矢斯張、干戈戚揚。」は、周頌「時邁」にも「載戢干戈、載櫜弓矢」という、形が類似して意味が逆になる表現がある。いま「時邁」の全文を示すと、

時邁其邦、昊天其子之、實右序有周。薄言震之、莫不震疊。懷柔百神、及河喬嶽。允王維后、明昭有周。式序在位、載戢干戈、載櫜弓矢、我求懿德、肆于時夏、允王保之。

ここに諸国を巡狩すれば、昊おおいなる天も子といつくしみ、まことに周をたすけ秩序を保たせ賜う。さてもその威を轟かせれば、震え懼れぬ国はなし。諸々の神をも懷け、さらには河伯に岱宗も。まことに王こそ天下の君主、輝かしきわが周よ。序列を守って位に在り、さても干戈を集め、弓矢を袋に収め、われはうるわしき徳を求め、この中華に遍くせん、まことに王こそ天命を保たん。

この詩は押韻が明らかではなく、周詩の最も古い形のものであろう。『春秋左氏伝』宣公十二年はこの詩を武王克殷をたたえる詩として引くが、詩序は「巡守告祭柴望也（巡守して告祭柴望するなり）」と言い、巡狩して高山大川を望む祭祀を行う際の詩とする。「懷柔百神、及河喬嶽」という句があることからすると、詩序にいうような王の巡狩をうたった歌とするのが妥当であろう。諸侯の武器を収

めさせることを言う「載戢干戈、載櫜弓矢」を、「公劉」では逆に新都建設のために武器を持って出発する表現に転用したと考えられる。一方古公亶父（大王）は、周頌「天作」で文王とともにたたえられている。

天作高山、大王荒之。彼作矣，文王康之。彼徂矣，岐有夷之行，子孫保之。

天は高山を作り、大王（古公）はこれを治めたまう。大王の既に治めたまえば、文王がこれを安んじたまう。大王の行きたまえば、岐山に平らかなる道あり、子々孫々これを保て。

ここでの高山は岐山を指すが、極めて簡略な描写である。山を安んじ整えたという表現は二雅にも見られるが、二雅では禹の功績として歌われる。小雅「信南山」一章では

信彼南山、維禹甸之。畇畇原隰，曾孫田之。我疆我理，南東其畝。

長く伸びる南山は、禹の治めしところ。平らかな原と沼地は、曾孫の耕せしもの。田畑を限り畔道を通し、南に東に畝を通す。

と、農業祭祀を導く表現であり、大雅「文王有声」五章では武王が造宮した鎬京に注ぐ豊水を「維禹之績」としてたたえている。また大雅「韓奕」一章では

奕奕梁山、維禹甸之。有倬其道、韓侯受命。

大いなる梁山は、禹の治めしところ。輝かしきその道徳で、韓侯は天命を受けたもうた。

と云い、梁山を韓侯の受命を導くために用いている。大雅「崧高」一章では

崧高維嶽、駿極于天。維嶽降神、生甫及申。

大いに高きかの四岳、大いさ天をも極めんばかり。さても四岳に神降りたまひ、仲山甫と申伯を生みたもうた。

と言ひ、嶽を神の降る山として、仲山甫と申伯の出生を導くのに用いているから、これから推せば禹は山を安んじ整えた神的存在であり⁵、「天作」はこれを大王と文王に置き換えて彼らの神格化を図ったのであろう。

なお魯頌「閟宮」六章は

泰山巖巖、魯邦所詹。奄有龜蒙、遂荒大東。至于海邦、淮夷來同。莫不率從、魯侯之功。

泰山はそそり立ち、魯の国中が仰ぎ見る。亀と蒙の山を領有し、遠く東の果てまで極めた。海沿いの国まで来てみれば、淮夷もやってきて臣属を誓ひ、服従しない者はない。これぞ魯侯のおん手柄。

と云い、泰山や亀蒙のような名山の名を挙げて魯国をたたえる。この詩はいくつもの名山の名を連ね、国土の広がり表現する最初のものである。大雅での固有名詞の山は宗教的聖地の名残が見られるのに対し、「閟宮」の山名は宗教的な雰囲気は稀薄になっている。これらはいずれも山名を挙げるだけで、山そのものの風景をつぶさに描くものではない。祭祀儀礼の場では、山名を挙げさえすれば、それ以上の説明がなくても宗教的な雰囲気共有することができたのであろう。ところが「縣」では「天作」のように岐山を神的なものとして描く表現はなく、岐山の麓の根拠地の風景を描く方に重点があり、一章で古公が新都造宮に出発するまでの経緯を歌う表現も、説明的なものになっている。先に見た「生民」も全体として説明的な表現であり、宗教的な雰囲気共有するというより、故事を語ることが目的としたものと考えられる。「公劉」もこの二首ほど説明的な表現ではないものの、やはり公劉の故事を語ることが目的と見られ、このような詩では情景の描写が豊かになる傾向があるといえる。

三

次に文王と武王を歌う詩を見ると、大雅で文王をたたえる歌は全体に情景描写が少ない傾向がある。たとえば「文王」は全体が祝頌の言葉で占められており、文王と武王をたたえる「文王有聲」も

文王有聲、適駿有聲。適求厥寧、適觀厥成。文王烝哉。

文王は名声高く、いよいよ名声は高まった。安らかならんことを求め、天下の平らかなるを見た。すばらしき文王よ。（一章）
文王受命、有此武功。既伐于崇、作邑于豐。文王烝哉。

文王は天命を受け、この武功を立てた。崇を伐つてから、豊邑を造営した。すばらしき文王よ。（二章）

築城伊瀋、作豐伊匹。匪棘其欲、適追來孝。王后烝哉。

城壁を築き堀を巡らせば、豊の都にふさわしい。私欲のために手柄を急がず、祖先の遺志を継ぎしもの。すばらしき君王よ。（三章）

王公伊濯、維豐之垣。四方攸同、王后維翰。王后烝哉。

王の手柄は輝かし、これぞ豊邑をめぐる垣。四方の諸侯も集まって、君王は柱のよう。すばらしき君王よ。（四章）

前半四章は文王の豊邑造営をうたうが、全体に祝頌の方が主であって、豊邑の情景や行動の描写は必要最小限である。後半四章は武王の鎬京建設を歌うが、

豐水東注、維禹之績。四方攸同、皇王維辟。皇王烝哉。

豊水の東に注ぐは、禹の治めし手柄。四方の諸侯も集まって、君王こそは彼らの君主。すばらしき君王よ。（五章）

鎬京辟廱、自西自東、自南自北、無思不服。皇王烝哉。

鎬京の辟靡には、西から東から、南から北から、慕って服しない諸侯はない。すばらしき君王よ。(六章)

考ト維王、宅是鎬京。維龜正之、武王成之。武王烝哉。

占いを問うは王、都を置くは鎬京の地と。亀甲は正しく吉凶を示し、武王は都を完成させた。すばらしき武王よ。(七章)

豊水有芑、武王豈不仕。詒厥孫謀、以燕翼子。武王烝哉。

豊水のほとりは草深きも、武王は事業を行った。子孫にその謀が及び、子への助けとなった。すばらしき武王よ。(八章)

と、禹の功績を引きながら鎬京を完成させ諸侯が四方から集まる様子をうたい、祝頌の方が主である。占いを行う様子も描かれるが、行動を必要最小限の描写でいうだけである。

一方で文武に関する具体的な情景描写が見える詩もある。「皇矣」は上帝が下界を照臨することから歌い出すが、二章で

作之屏之、其雷其翳。脩之平之、其灌其漑。啓之辟之、其櫟其柞。攘之剔之、其榛其柘。帝遷明德、串夷載路。天立厥配、受命既固。切り払い取り除くは、立ち枯れに倒れ木。整えて平らにするは、灌木に櫟。切り開き押しつけるは、櫟に柘。取り払い削り取るは、榛に柘。上帝の天命が明德の人に遷ると、逃げる串夷は道に溢れた。天は文王に配偶を立て、受けし天命はもはや動かぬ。

と、列挙表現を用いて文王の国土開拓のさまをいい、三章では

帝省其山、柞棫斯拔、松柏斯兌。帝作邦作對、自大伯王季。維此王季、因心則友、則友其兄、則篤其慶、載錫之光。受祿無喪、奄有四方。

上帝がその山を見れば、クヌギも械の木も引き抜かれ、松柏の林は道が通じる。上帝が国を興し代々伝えるは、大伯・王季の時から。さてもこの王季は、心から友愛の情を持ち、その兄に友愛なれば、その天慶も篤く、光栄を賜った。福祿を受けて失わず、四方

の国を支配した。

と、開拓の完成を大伯（王季の兄）・王季以来の徳としてたたえ、後半から四章に至って王季の徳をたたえるが、観念的なもので具体的な事蹟は描かれない。五章・六章では

帝謂文王、無然畔援、無然歆羨。誕先登于岸、密人不恭、敢距大邦、侵阮徂共。王赫斯怒、爰整其旅、以按徂旅、以篤于周祜、以對于天下。

上帝は文王にのたまう、人心を叛かせてはならぬ、欲望のままにさせてはならぬと。そこでまず岸に登れば、密の人は恭順ならず、この大国を受け入れず、阮を侵略し共へ向かっている。王はかくて激怒し、ここに軍旅を整えて、敵の行軍を止め、周の幸いを篤くし、天下の心に答えようとした。（五章）

依其在京、侵自阮疆。陟我高岡、無矢我陵。我陵我阿、無飲我泉。我泉我池、度其鮮原。居岐之陽、在渭之將、萬邦之方、下民之王。文王は安んじて都にいる間に、周軍は阮の境を侵した。高い丘に登ってみれば、丘には布陣する敵兵もない。わが丘にもわが阿にも、わが泉を飲む者もない。わが泉とわが池と、良い平原を見定める。かくて岐山の南、渭水のほとりに居を定め、万国の手下となり、黎民の王となった。（六章）

密との戦争に勝利して新都を定めた事蹟が描かれるが、その情景描写は二章や「生民」「公劉」「緜」に比べると、具体的な行動よりも圧倒的な勝利を強調する観念的な表現の割合が高い。この詩における上帝や先王は文王に幸いを保証すべき神的存在であって、その事蹟よりも徳の方が強調されるのであるが、これに対して文王はその徳をたたえられる観念的存在でありながら、人王としての性格も併せ持っており、ある程度の具体的事蹟も語られる。

また「大明」は文王の生い立ちから武王克殷までを歌うが、一―三章は

明明在下、赫赫在上。天難忱斯、不易維王。天位殷適、使不挾四方。

天は明るく下に臨み、輝かしく上にある。天意は信じ難いもの、易からざるは王の地位。天命を受けた殷王も、四方を保てなくなった。(一章)

摯仲氏任、自彼殷商、來嫁于周、曰嬪于京。乃及王季、維德之行、大任有身、生此文王。

摯（殷の諸侯国の名）の仲氏任は、かの殷の国より、周に嫁し来たり、都で妃となった。そこで王季と、睦まじく徳を行えば、大任は身ごもって、この文王を生みたもうた。(二章)

維此文王、小心翼翼。昭事上帝、聿懷多福。厥德不回、以受方國。

さてもこの文王は、心細やかに慎み深い。上帝に仕えること明らかに、多く幸あらんことを願う。その徳は違^{たが}うことなく、四方の国を受け継がれた。(三章)

と、全体として祝頌の語が多く、文王の事跡に関して具体的な描写は乏しい。四～六章では文王が妃を迎え、生まれた武王に克殷の天命が下ったことがうたわれるが、これも祝頌の表現で占められる。ところが七・八章では牧野の戦いの場面が台詞や修飾を伴って描かれる。

殷商之旅、其會如林。矢于牧野、維予侯興、上帝臨女、無貳爾心。

殷の大軍は、林のように集まった。牧野で誓いを立てて言う、我らここに興らん、上帝が汝らを見ぞなわす、二心を抱いてはならぬと。(七章)

牧野洋洋、檀車煌煌、駟騶彭彭。維師尚父、時維鷹揚。涼彼武王、肆伐大商、會朝清明。

牧野の地は広々と、戦車は輝き、馬は勇み立つ。軍師尚父（太公望）は、鷹のように跳び上がる。輝かしき武王は、大いなる殷を打ち破り、会戦の朝は晴れ渡った。(八章)

武王克殷を歌う詩には周頌「武」もあるが、

於皇武王、無競維烈。允文文王、克開厥後。嗣武受之、勝殷遏劉、耆定爾功。

ああ皇^{おお}いなる武王、その強きいさおしよ。まことに文徳ある文王、よくその後を開きたまう。その跡を継いで受け、殷に勝利して滅ぼし、そのいさおしは定まりぬ。

と、武王克殷の事実に簡単に触れるだけで、具体的な戦争の様子は描かれない。

このように文王・武王を歌う詩は部分的に情景描写は見えるものの、后稷や公劉に比べるとまとまった物語をなしているとは言い難いものである。つまり文王や武王の事蹟は、大雅諸篇の作られた時代にはまだ物語性に富んだ「神話」を形成するには至っていなかったといえる。春秋期になると文武の「神話」が断片的に文献上にも見えるようになる。たとえば『国語』晋語四に見える、胥臣が晋文公に答えた言葉は

臣聞昔者大任娠文王不變、少洩於豕牢、而得文王不加疾焉、文王在母不憂、在傅弗勤、處師弗煩、事王不怒、孝友二號、而惠慈二蔡、刑于大姒、比於諸弟、詩云「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。」

臣聞く昔者^{むかし}大任は文王を娠^{はら}みて変わらず、豕牢に少洩し、而して文王を得て疾を加えず、文王は母に在りて憂えしめず、傅に在りて勤めしめず、師に処して煩わしめず、王に事えて怒らしめず、二號に孝友にして、而して二蔡に惠慈し、大姒に刑^{のつと}らしめ、諸弟に比^{した}しむ。詩（大雅「思齊」）に云う「寡妻に刑^{のつと}り、兄弟に至り、以つて家邦を御^{おさ}む」と。

また『左伝』襄公三十一年の北宮文子^{のつと}が衛侯に言った言葉に

周詩曰「朋友攸攝、攝以威儀。」言朋友之道、必相教訓、以威儀也。周書數文王之德曰「大國畏其力、小國懷其德。」言畏而愛之也。詩云「不識不知、順帝之則。」言則而象之也。紂囚文王七年、諸侯皆從之囚、紂於是懼而歸之、可謂愛之。文王伐崇、再駕而降爲臣、蠻夷帥服、可謂畏之。文王之功、天下誦而歌舞之、可謂則之。文王之行、至今爲法、可謂象之。有威儀也。

周詩（大雅「既醉」）に曰く「朋友の撰す攸、撰すに威儀を以てす」と。朋友の道は、必ず相い教訓するに、威儀を以てするを言うなり。周書に文王の徳を数えて曰く「大國は其の力を畏れ、小國は其の徳に懷く」と。畏れて之を愛するを言うなり。詩（大雅「皇矣」）に云う「識らず知らず、帝の則に順う」と。則りて之に象るを言うなり。紂は文王を囚うること七年、諸侯皆な之に従いて囚われんとし、紂是に於いて懼れて之を歸すは、之を愛すと謂うべし。文王崇を伐つに、再駕すれば降りて臣と爲り、蛮夷帥（ひき）い服するは、之を畏ると謂うべし。文王の功、天下誦して之を歌舞するは、之に則ると謂うべし。文王の行い、今に至るまで法と爲るは、之に象ると謂うべし。威儀有ればなり。

と、『詩経』皇矣を引きながら、それに文王幽閉や崇攻略の具体的な事蹟を、四言を主とした整った句で付け加える。文王の事蹟も春秋期には「神話化」されていたが、もはや新たな雅篇は作られず、従来の詩を引きながら整った句で「文王神話」を語る。しかしこれらの言葉は登場人物の行動を必要最小限しか描かず、「生民」「公劉」などのような情景描写には乏しい。ここで『孟子』梁惠王上の、孟子が大雅「靈台」を引きながら文王の事蹟を語る一段を見てみよう。

孟子見梁惠王。王立於沼上、顧鴻雁麋鹿、曰「賢者亦樂此乎。」孟子對曰「賢者而後樂此。不賢者雖有此不樂也。詩云『經始靈臺、經之營之。庶民攻之、不日成之。經始勿亟、庶民子來。王在靈囿、麋鹿攸伏。麋鹿濯濯、白鳥鶴鶴。王在靈沼、於物魚躍。』文王以民力爲臺爲沼。而民歡樂之、謂其臺曰靈臺、謂其沼曰靈沼、樂其有麋鹿魚鼈。古之人與民偕樂、故能樂也。湯誓曰『時日害喪、予及女皆亡。』民欲與之皆亡、雖有臺池鳥獸、豈能獨樂哉。」

孟子 梁の恵王に見ゆ。王沼の上に立ち、鴻雁麋鹿を顧みて、曰く「賢者も亦た此を楽しむか」と。孟子 対えて曰く「賢者にして後に此を楽しむ。賢ならざる者は此有りと雖も楽しまざるなり。詩（大雅「靈台」）に云う『靈台を經始し、之を經し之を営す。庶民之を攻め、日ならずして之を成す。經始亟かにする勿きも、庶民のごとく来たる。王は靈囿に在り、麋鹿の伏す。鴈鶴濯たり、白鳥鶴鶴たり。王は靈沼に在り、於ち切て魚躍る』と。文王民の力を以て台を為り沼を為る。而るに民之を歡樂し、其の台を謂いて靈台と曰い、其の沼を謂いて靈沼と曰い、其の麋鹿魚鼈有るを楽しむなり。古の人は民と偕に楽しむ、故に能く楽しむなり。（『尚書』湯誓に曰く『時の日害か喪ぶ、予女と皆に亡びん』と。民之と皆に亡びんと欲すれば、台池鳥獸有りと雖も、豈に能く独り楽しまんや』と。

梁の恵王が狩りのための沼地に孟子を招いた場面であるが、冒頭の沼地そのものの描写はやはり必要最小限である。引用されている詩では獲物の立派さや沼地の豊かさを形容する表現が見られるが、『孟子』自体にはそれが無いことに注意が必要である。『詩経』のよな韻文では形容詞による風景描写も行われるが、散文は専ら状況や行動の説明のためのものであって、話の本筋に必要な、修飾を伴う風景描写は行われなかったのである。

「靈台」は『孟子』では文王の事蹟を歌ったものとされ、詩序でも「民始附也。文王受命、而民樂其有靈德、以及鳥獸昆蟲焉。（民始めて附するなり。文王命を受け、而して民は其の靈德有りて、以て鳥獸昆蟲に及ぶを楽しむ。）」と云うが、詩の中では王の名は明示されない。「生民」「公劉」「皇矣」などの特定の王をたたえる開国叙事詩とは性格の異なるものであろう。とりわけ靈囿の動物の豊饒さを描く表現は、周と通婚した諸侯であった韓をたたえる「韓奕」五章の

孔樂韓土、川澤訏訏、魴鱖甫甫、麋鹿嘒嘒、有熊有羆、有貓有虎、慶既令居、韓姑燕譽。

韓はなんと楽しいことよ、川や沼地は広大で、平魚もしたためよく肥えて、牡鹿や牝鹿が群れ集い、熊もありヒグマもあり、猫もあり虎もあり、お祝いしてここに住まわせ、宴をして夫の覚えもめでたい。

や、狩獵を歌う小雅「吉日」二・三章

吉日庚午、既差我馬。獸之所同、麀鹿麀麀。漆沮之從、天子之所。

吉日は庚午の日、揃いの馬が選ばれた。獸の集まるところには、牝鹿と牡鹿が群れ集う。漆と沮の川から、天子の所へ追い立てる。
(一章)

瞻彼中原、其祁孔有。儻儻俟俟、或群或友。悉率左右、以燕天子。

かの平原を見れば、たくさんの獸がいる。身軽に駆けるもそろそろ行くも、群れなすものも連れ立つものも。左右の臣を皆引き連れて、天子に狩りを楽しませる。(三章)

と通じるものがある。これらの詩は特定の人物についての叙事ではなく、周王、あるいは韓侯であれば誰でも通じうるものである。王者たる者のあるべき姿、あるいは願望を示したものとも解することができる。

四

周頌「思文」「天作」「武」などのような純粋な祝頌詩には情景描写が見られない。これに対して「生民」「公劉」「綿」のようなまとまった物語を歌う詩の場合には、その背景として鋪陳表現や形容詞を用いた情景描写が現われる。周頌でも農事や祭祀の様子を詳しく描写した作品は存在するから、情景描写の有無は単純に時代の先後を意味するのではなく、歌われる場面の違いに由来すると見るのが妥当であろう。

周の先王を歌う「生民」「公劉」「綿」は、「文王」のような作品に比べると、説明的な描写で故事を歌う。すなわち故事を知らない

者に對して教え諭すような口ぶりである。このような作品には帝王学の教材としての用途もあったのではなからうか。

『国語』楚語上に莊王から太子箴の教育係に任せられた士臺が申叔時に帝王学の要諦を尋ねる話があり、申叔時は次のように答えている。

教之春秋、而爲之聳善而抑惡焉、以戒勸其心。教之世、而爲之昭明德而廢幽昏焉、以休懼其動。教之詩、而爲之導廣顯德、以耀明其志。教之禮、使知上下之則。教之樂、以疏其穢而鎮其浮、教之令、使訪物官。教之語、使明其德、而知先王之務用明德於民也。教之故志、使知廢興者而戒懼焉。教之訓典、使知族類、行比義焉。

之に春秋を教え、而して之が爲に善を聳^すめて惡を抑え、以って其の心を戒勸せしむ。之に世（先王の系譜）を教え、而して之が爲に明德を昭かにして幽昏を廢し、以って其の動^{おこな}いを休懼せしむ。之に詩を教え、而して之が爲に顯德を導き広め、以って其の志を耀明せしむ。之に札を教え、上下の則を知らしむ。之に樂を教え、以って其の穢れを疏にして其の浮を鎮め、之に令（法令）を教え、物官を訪^{はか}らしむ（百官の事業を測り知らせる）。之に語（先王の言葉の記録）を教え、其の德を明かにし、而して先王の務を知り用つて德を民に明かにせしむるなり。之に故志を教え、廢興する者を知りて戒懼せしむ。之に訓典（古えの帝王の書）を教え、族類を知り、比義を行わしむ。

「詩」を先王の德を広くし志を明らかにするものとして挙げているが、他に「故志」を教えて興廢を知り戒めとさせるとも説いている。故志は韋昭注に「謂所記前世成敗之書（前世の成敗を記す所の書を謂う）」と言ひ、史書を指すのであらうが、『詩經』の開国叙事詩もこれと同じ役割を担っていたと考えられる。西周期の周王朝における帝王学が楚国のものと全く同様であつたとは限らないが、周祖文王の德をたたえる詩とともに、遙か上古の誰もその現實を知らない時代の先王については、その物語を詳細に描いた詩を用いていた可能性は十分に考えられよう。

では大雅「韓奕」の場合はどうであらうか。韓侯の周王朝との通婚は、周人にとつての文王や武王の故事と同様、遙か古代の話では

なく現実性を感じられる時代の話だったはずであるにもかかわらず、文武をたたえる詩とは異なり、豊かな情景描写が見られる。「韓奕」は韓氏に代々伝わるものとされる詩であり、韓氏にとっては周との通婚をまとまった物語に仕立てることによって「神話化」して顕彰し、帝王学の一環として伝えていこうとする意図があったのではないか。二章で周から贈られた引出物の名を列挙し、三章で周からの饌別の宴の様子を詳細に描いているのも、そのことをうかがわせる。この詩は恐らく「生民」や「公劉」などの叙事詩が成立して以後に、それらの表現技法を取り込んで作られたものであろう。

附記 本論文は二〇一四年八月に中国河北省石家庄市にて開催された「第十一届詩経国際學術検討会」での口頭発表「試論《詩経》景物描寫的演變」をもとに若干の加筆修正を加えたものである。また本論文はJSPS科研費（課題番号26370396）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1 「儘管《詩経》時代距離山水詩的成熟時期還很遙遠，可是從《詩経》中反映出來的山水觀，以及詩人對山水景物的描述，或許能夠探索出於後世山水使得一些淵源關係。」（王国璽『中国山水詩研究』中華書局、二〇〇七年（原著台湾聯經出版事業公司、一九八六年）、一一頁）
- 2 小尾郊一『中国文学における自然と自然観』岩波書店、一九六二年、一一二頁。
- 3 『晋陽學刊』二〇一四年第三期、四〇～四五頁。
- 4 白川静『詩経研究』、朋友書店、一九八一年、五五三頁。
- 5 これに関する詳細は拙稿「論《詩経》中的禹」（『詩経研究叢刊』第三輯、二〇〇二年）を参照されたい。
- 6 これに関する詳細は拙稿「《詩経》叙事詩的空間認識」（『詩経研究叢刊』第十七輯、二〇〇九年）を参照されたい。
- 7 白川静『詩経研究』（前掲、五八三～五八四頁）や境武男『詩経全釈』（汲古書院、一九八四年、七三二頁）がこの説を採る。